

働く

✉t-rodo@asahi.com

金曜掲載



特定郵便局長から

介護タクシー運転手

小出光男さん(64) 国

妻を看護 車いすの苦勞知る

スロープのついたワゴン型車両の後ろに回り、声をかける。「下がりますよ」。

配車サービスセンターから連絡を受けて、お年寄り中心に送り迎える。

妻の腹部に原因不明の肉腫が見つかったのは、1994年ごろ。足腰が弱くな

ある日、死を覚悟した妻が「珍しい病気なんでしょう？」と献体を申し出た。

愛知県大府市の介護タクシー運転手の小出光男さん(64)が、車いすのハンドル

車いすのお客さんが多いため、曲がるときや止まる

儀なくされた姿を見て「妻の面倒をみよう」と考えた。

96年、妻は逝った。最期まで、他人を思いやった妻



車いす仕様に改造してある介護タクシーと小出光男さん。今では固定客も増えた一名古屋市中区

をみると必ず避けて通るように心がけている。

当時勤めていた愛知県知立市の郵便局で、上司に辞意を申し出たが、慰留された。自宅から通える同県東海市の特定郵便局長として異動となった。

そんなとき、新聞の記事で介護タクシーの存在を知る。妻の死から6年後、52歳の時だった。(豊岡亮)

「乗り降りするのに人の手が必要な方が多く、自分が必要とされている」。人のために役立っている。そう実感する日々だ。

しかし、介護の日々は大変だった。当時、車いすですのまま乗れる乗用車はほ

ほとんど普及していなかった。病院通いで助手席に乗せるのは一苦勞だった。

地元の高校を出た後、郵便局勤め約30年の小出さん

が、介護タクシーを始めようと思ったのは、妻の病気がきっかけだった。

妻の腹部に原因不明の肉腫が見つかったのは、1994年ごろ。足腰が弱くな

一 身
二 生

特定郵便局長 から

介護タクシー運転手

小出光男さん(64) 下



特定郵便局長時代の小出光男さん＝愛知県大府市

徐々にリピーター 「天職です」

「介護タクシー?」。新聞を読んでいて、見慣れない言葉が目に入った。車いすに乗ったままで、家から病院のベッドまで移動できる、と書いてある。

46歳で逝った妻を介護した経験から、介護を必要とする人はもちろん、一緒に暮らす人にも役立ちそうだと。若いころ、郵便局の窓口業務を単調と感じ、苦痛で

転職を考えたことがある。しかし、母親から「自分の仕事から逃げてはダメ」と諭され、思いとどまった。それからは、窓口に来るお客さんの相談にのるのが、生きがいだった。

特定郵便局長の仕事にも満足していたが、妻から背中を押された気がした。郵便業務の民営化が決まったのを機に2007年、57歳で郵便局を辞めた。

タクシーの運転に必要な二種免許を取った。短期間で合格しようと、学科試験

の問題を1週間で4千問解き、介護タクシー向けの研修も受けた。07年12月、開業にこぎつける。最初の1年間はお客さんも延べ20人程度で、売り上げも計20万、30万円ほど。それでも仕事を続けていくと、少しずつリピーターは増えていった。昨年の利用者は延べ1千人ほどに達している。

「でも、指名してくれるお客さんのことを考えると、なかなか辞められないんです」 天職だと、胸を張って言える。(豊岡亮)

今年1月、この女性の娘さんから電話があった。「母は『小出さんの車に乗ると、いろんな所に行けてうれしい』といつも言っていました」。そしてつけ加えた。「最後まで、ありがとうございました」